

KALS NEWSLETTER 50

2014年11月
九州アメリカ文学会
事務局 西南学院大学文学部英文学科
福岡市早良区西新6-2-92
〒814-8511

ホーソン縁の地を訪ねて

稲富百合子（福岡大学）

幸いにも今年は3月と9月に二度アメリカを訪れる機会に恵まれた。それは主にハーバード大学の図書館（ワイドナー、ファイン・アーツ、ホートン）での資料収集を目的としたものだった。もちろんナサニエル・ホーソンの縁の地を巡ることも大きな楽しみだったが、今年の3月のボストンは氷点下の日も珍しくなく、図書館に籠る日々。そのような中、その日の天候と相談しながらボストンを離れて遠出する日もあり、なかでも、ホーソンが通ったボードーン大学のホーソン・ロングフェロー・ライブラリーで過ごした一日は忘れられない。ボードーン大学と言えば、彼の同窓生には第14代大統領フランクリン・ピアスや彼の生涯の友人ヘンリー・ワズワース・ロングフェローがいたことは有名である。この大学はメイン州にあるため、ボストンから日帰りでの訪問は難しく、渡米前に事前に一泊二日の予定で宿を取った。その日は天候に一抹の不安を覚えながら、夕方の電車に乗り込み、片道数時間かけて、いざメイン州ブランズウィックへ。道中、日が暮れていく様子を車窓から眺めながら、1821年、ホーソンがメイン州レイモンドから叔父のロバート・マニングと共に馬車で向かった当時の様子に思いを馳せた。すっかり日も暮れ、外の様子が分からなくなった頃、突然電車がガタンと止まり後方へ走り出すと、状況が掴めずすっかり混乱してしまったこちらの様子に気付いた他の乗客が、この電車は線路の変更のためにいったん後方に戻り、また前進するから大丈夫だと説明してくれた。しばらくすると、ポートランドを通過、そこには展望台や灯台、それにロングフェローが子供時代を過ごしたロングフェロー・ハウスがあると、専修大学の成田雅彦先生に教えて頂いていたが、そこに立ち寄るためにはこの日程では厳しく、またの機会に訪れようと心に決めた。徐々に乗客が一人、二人と降車し、周りを見渡してもほとんど乗客の姿も見えず、がらんとした車内。ようやくブランズウィックへ到着し、電車を降りると、経験したことのない凍てつくような寒さ（氷点下17℃）にぶるっと身震いしながらニット帽を目深にかぶり直

し、その上からダウンジャケットのフードをかぶり、他に歩行者も見えない中、駅近くのホテルへと向かった。

翌朝、図書館の開館と同時に入れるよう早起きしてホテルを出ると、辺り一面銀世界、溶け出した雪と滑りやすくなった道を、慎重に歩を進めた。所定の手続きを済ませ、スタッフの部屋の隣の閲覧室で、箱に保管されたホーソンに関連する貴重な資料を次々に運んでもらい、写真撮影の許可も得て、夕方の帰りの電車の時刻を気にしながら、資料収集に励むものの、膨大な資料の山にこれは一日では到底無理だと実感した。キュレーターに普段は部外者はいれないという資料室に通され、ホーソンと彼の同窓生達のシルエットを見ながら、ホーソンだけでなくロングフェローの功績についての説明も受けた。私たち日本人にも馴染みのある童謡「大きな栗の木の下で」の作詞もロングフェローであり、私がそれを日本語で口ずさむと、他にもたくさんの童謡の作詞も手掛けていたことを彼は嬉しそうに教えてくれた。そして、なぜ日本ではロングフェローではなく、ホーソン研究が盛んなのかと尋ねられた。

それ以来、ホーソンとロングフェローの交友関係にも関心が向き、9月にはハーバード大学の近くにあるロングフェロー邸を再訪。交友関係の広いロングフェローが数多くの芸術家や文学者をホーソンと引き合わせたこと、また、この二人が常に地理的に離れた環境に身を置きながらも、生涯の友として文通を続けながらお互いを尊敬し合っていたことを再認識した。

さて再び3月の旅に話を戻すと、ホーソンが新婚時代を過ごした旧牧師館を久しぶりに訪れた際、帰りにスタッフから雪に覆われた庭に咲いていたというネコヤナギを春の訪れが待ち遠しいと言いながら渡された。その後、私は歩いて20分ほどの所にあるオーチャードハウスとウェイサイドをつなぐホーソンの散歩道に記念の印としてそれをそっと置いた。ウェイサイドは現在修復中だが、私が7年前に訪れた時は、地元の子供達が、この家の住人だったオルコット一家やホーソン家の子供達に扮し、「この部屋はパパが執筆作業に励んだ場所です」などと紹介してくれたことを思い出した。コンコードを訪れるのは4回目となったが、毎回新鮮な発見がある。

最後にもう一つ、9月にこれも念願だったフルートランズ（ブロンソン・オルコットによる超絶主義の実験農場）を訪れた。現地に着いたら駅でタクシーを拾って行こうと考えていたが、それが安易な考えであることにすぐに気付いた。駅近くの酒屋に入り、店員の方にフルートランズに行きたいことを伝えると、小さい町だからバスもタクシーもないという返答。落胆する私に、彼女は空港などを結ぶ長距離を扱うタクシーしかないから期待しないでと言いながらも、2件電話をかけると、そのうち1件はノーという答え、もう一件は留守電に繋がり伝言を残してくれた。店内で30分ほど待ち、諦めかけていたその時、一本の電話が入り、女性ドライバーが迎えに来ると言う。帰りのピックアップも約束し、博物館を巡り、オルコット一家の生活の様子やシェーカー教徒や先住民に関する説明を受け、緑の山々に囲まれる美しい風景を目にしながら、当時彼らが冬の寒さをどのようにしのごうとしたのだろうか、エマソンがこの実験共同体が長続きしないと確信したエピソードをふと思い出しながらこの地を後にした。

地区便り

<熊本地区>

熊本大学 池田志郎

前回以降の熊本アメリカ文学研究会の活動をお知らせいたします。この研究会の中心は九州アメリカ文学会の熊本在住の会員ですが、地域にも開放しており、アメリカ文学に関心のある方ならどなたでも参加できる和やかな会です。毎回、一般の方も何名か参加されています。また、発表者の関心領域により、文化研究についての発表も歓迎しています。

○124回（2014年7月5日）熊本大学にて

題 目： 短編"The Secret Life of Walter Mitty"の物語としての可能性—時代との呼応

発表者： 濱田 比呂美 （熊本大学非常勤講師）

司会者： 原口 昌子 （熊本大学非常勤講師）

*James Thurber のユーモアあふれる短い作品ですが、1930年代の時代性を含むメランコリーの特質というものを理解することができました。Twain の捻れた笑いに連なるユーモアを十分に楽しむことができました。また、映画の一場面も紹介がありました。

○125回（2014年9月20日）熊本大学にて

題 目： Jerry Spinelli の*Stargirl*解説

発表者： 池田 志郎（熊本大学）

司会者： 楠元 実子（熊本高専）

*授業で使用した際の学生の反応などを紹介しながらの発表でした。作品自体も面白かった、アメリカでもいじめの深刻な問題があるんだと分かった、というような感想が会員からも寄せられました。

*次回（126回）予定

2014年11月29日15:00から熊本大学にて

題 目： ホーソーンとオルコット—“Rappaccini's Daughter”を中心に

発表者： 山本 幹樹 （熊本大学非常勤講師）

熊本地区の研究会に関心のある方は、池田（ikedash@educ.kumamoto-u.ac.jp）までお知らせください。

<大分地区>

大分大学 雲 和子

地区委員を別府大学の上田先生から引き継いで以来、本当に地区委員らしいこともせず、大変申し分けないことです。役目を果たしていないなら、早くどなたかに引き継いで頂かなくてはと思いつつ、改めて名簿を見てみると、九州支部で登録している大分地区会委員は上田先生と私の2名に……。限界集落さながらの様相です。

研究から遠ざかり、研究者としてお恥ずかしい次第なのですが、先日日本英文学会九州支部大会で久しぶりに富山太佳夫先生のご講演「お化けの行進」を拝聴しました。『テキストの記号論』を読みワクワクしていた若い頃が蘇ってきました。そして尽きせぬ好奇心とますますの学究的探求へのご意欲が伝わってくる、めくるめくアクロバティックな先生のお話、久しぶりに楽しさを思い出しました。初心に立ち返りまた始めようと心した次第です。

まったく、大学生の反省文のようで申し訳ありませんが、今回はこれでご勘弁ください。山下祐介氏によれば限界集落は実は消滅しないとのことですので、大分地区も持ちこたえられますように。

<鹿児島地区>

鹿児島大学 千代田夏夫

鹿児島大学の千代田夏夫でございます。千葉義也先生（鹿児島大学名誉教授）は今年も「書誌：日本におけるヘミングウェイ研究—2013」（『ヘミングウェイ研究』第15号（日本ヘミングウェイ協会、2014）77-96頁）を寄稿されております、長きにわたる貴重な御仕事がまた一つ、積み重ねられました。森孝晴先生（鹿児島国際大学）は多くの写真を利用してロンドンの門司・小倉滞在を検証され、「ジャック・ロンドンと門司・小倉」というご論文が近く大学紀要に掲載のご予定です。また、11月中にはご自身の博士論文に加筆なされた研究書『ジャック・ロンドンと鹿児島—その相互の影響関係』をご上梓のよし、御同慶の至りです。6月には日本ジャック・ロンドン協会の研究・論文誌『ジャック・ロンドン研究』の第2号に、ロンドンの日露戦争時のレポート「朝鮮に駐留する日本軍を鮮やかに描写する」の翻訳と付記を寄稿されました。なお、6月の第22回の日本ジャック・ロンドン協会年次大会（立命館大学）では鹿児島国際大学大学院博士後期1年の学生さんが研究発表をなさいましたが、次回の第23回年次大会は鹿児島市で行なわれることになっている由、皆さまお楽しみに…千代田は「アメリカとアイルランド—F. スコット・フィッツジェラルドにおける島のイメージ」 「“Absolution”再考—フィッツジェラルドへのクイア・リーディングの試み」 「中学校英語教育教材としての米国文学作品—大学学部教育におけるテキスト選定作業を中心に—」の3論文を学内紀要に掲載、また日本アメリカ文学会関西支部7月例会シンポジウム「恐怖の君臨—盗品商品複製としてのエドガー・アラン・ポー」（於近畿大学）にて他の4人のシンポジストの方々とご一緒し、「F. スコット・フィ

ッツジェラルド「生還したポー」の可能性」を發表させていただきました。前便でもお便りいたしました。日本 F. スコット・フィッツジェラルド協会は各支部もいよいよ活発、9月には奈良女子大学にて関西・九州支部合同合評会が開催され、上記2拙稿も皆さまからご高評賜りました。霜月、皆さまおからだ御大切にお過ごしください。

<沖縄地区>

琉球大学 喜納育江

沖縄地区では、琉球大学の山城新先生が、2014年8月にPalgrave Macmillan社より、単著 *American Sea Literature: Seascapes, Beach Narratives, and Underwater Explorations*を上梓されました。これまで「陸」(terrestrial)を中心とする視点に偏りがちだった環境文学研究に、「海」(oceanic)という視点を導入しつつ、アメリカ文学に表象されたアメリカ社会と「海」の関係や、「海」の文化的意義について分析したエコクリティシズムの成果です。エコクリティシズムにおいても斬新な成果であるだけでなく、アメリカ文学に由来から存在する「海洋文学」というジャンルにも、新たな一石を投じる重要な批評であり、山城先生のここ10年の地道な研究が見事に結実した快挙であると言えます。九州アメリカ文学会の皆様にもぜひご一読いただければ幸いです。

一方、本地区の他の会員もそれぞれのジャンルにおける研究成果を高く評価され、学術誌への出版が決定している論文もあるようですので、ここに紹介します。まず、琉球大学の小林正臣先生の論文“Charles Bukowski at Work: *Post Office* and the Literature of Postal Service”が、日本英文学会九州支部『九州英文学研究』(Kyushu Studies in English Literature) 31号(2014)に掲載される予定です。また、国立沖縄工業高等専門学校の名嘉山リサ先生も、来月刊行予定の日本映画学会学会誌に“Autonomy through Traditional Performing Arts: The Use of Okinawan and Japanese Music in the Screen Version of *The Teahouse of the August Moon*”という論文の掲載が決定しています。名嘉山先生はまた、科学研究補助金に採択された研究課題に関し、6月と7月に、日本映像学会のシンポジウムと、京都大学を中心とする研究グループが主催している第3回琉球列島米国民政府(USCAR)フィルム鑑賞・検討会で、USCARフィルムに関する報告を行ったほか、夏休みにメリーランドの公文書館やコロンビア大学などで調査も実施されたそうです。また、蛇足となりますが、私、喜納は、現在所属している国際沖縄研究所で進めているジェンダー研究のプロジェクトの成果として、今年3月に大月書店から出版された『沖縄ジェンダー学第1巻～「伝統」へのアプローチ』に引き続き、『沖縄ジェンダー学第2巻～「制度」へのアプローチ』(来年3月刊行予定)の編集に専心しております。アメリカ文学と無関係に見えつつ、アメリカ文学で得た知見なくしてはまとめられない仕事であるような気もしており、しばらくは、アメリカ文学と異なる研究分野との間、あるいは社会との間に持ちうる接点を探る作業を続けてみたいと考えています。

事務局からのお知らせ

(1) 日本アメリカ文学会ホームページ刷新に関するお願い

日本アメリカ文学会の本部では、ホームページ担当業者を2015年度で変更しなければならなくなりました（業者の都合によるものです）。これにあわせてHPの刷新を考えていますので、各支部でHPにどのような内容を加えて欲しいか、どこを変えれば良いと考えられるかといった等、ご意見、ご希望をお聞かせ頂ければと思います。支部で意見を集約のうえ12月末日までに本部に回答することになっておりますので、12月10日頃までに、事務局アドレス（宮本敬子:keikom@seinan-gu.ac.jp）までご回答くださいますようお願いいたします。

(2) 九州アメリカ文学賞応募

『九州アメリカ文学』55号にありますように、九州アメリカ文学賞（新人賞）の応募締切は2015年2月28日です。応募をお待ちしています。

従来は郵便による応募に限定していましたが、今年より電子メールによる応募も可能となりました。

(i) 郵送の場合

〒814-8511 福岡市早良区西新 6-2-92 西南学院大学文学部英文学科
九州アメリカ文学会事務局 宮本敬子 宛

(ii) 電子メールの場合

高橋美知子（福岡大学）mtakaha@fukuoka-u.ac.jp

いずれの場合も、「九州アメリカ文学賞論文応募」と明記して下さい。

(3) 『九州アメリカ文学』投稿

『九州アメリカ文学』55号にありますように、『九州アメリカ文学』への投稿は2015年4月30日締切です。こちらも応募をお待ちしています。

宛先は

〒814-8511 福岡市早良区西新 6-2-92 西南学院大学文学部英文学科
九州アメリカ文学会事務局 宮本敬子 宛

(4) 「九州アメリカ文学会出版助成金」申請

2015年度「九州アメリカ文学会出版助成金」への申請締め切りは、2015年2月21日（土）です。申請の要領は、『九州アメリカ文学』55号を参照下さい。

(5) 九州アメリカ文学会第61回大会発表者募集

九州アメリカ文学会第61回大会は、2015年5月9日（土）、10日（日）の両日、鹿児島大学において開催されます。つきましては、下記の要領で研究発表を募集いたしますので、ふるってご応募ください。多くの研究者の積極的なご参加をお願いいたします。

1. 発表者は大学院博士前期課程（修士課程）在学者を含むアメリカ文学研究者。

2. 発表時間は40分（発表30分、質疑応答10分）。
 3. 発表は英語でも日本語でも可。
 4. 発表希望者はタイトルとレジюмеを以下の要領で提出すること。
 - * レジюмеは発表の際に使用する言語で作成すること。
 - * 英文の場合は300語程度。
 - * 日本文の場合800字程度とし、数行の英語の要旨または数語のキーワードを文末に付加すること。
 - * 発表題目の固有名詞（作家名・作品名）は英語とする。
 - * コンピューターで作成する場合は、Wordを使用し、メールで添付書類として送付するか、ワープロソフト名が明記されたフロッピーディスクに原稿を添えて郵送すること。
 - * 提出先 メール tsutomu@fkc.kyushu-u.ac.jp
- 郵送先 〒811-1123 福岡市早良区内野7-11-6 高橋 勤
- * 締め切りは2015年2月21日（土）（必着）。
 - * 大会ならびに発表に関するお問い合わせは、高橋 勤（tel.092-803-2217/ e-mail: tsutomu@fkc.kyushu-u.ac.jp）までお願いします。実りある大会にするために、多くの応募を期待いたします。

(6) 『アメリカ文学研究』, *The Journal of the American Literature Society of Japan* 論文投稿

日本アメリカ文学会発行の『アメリカ文学研究』(和文、英文)への論文投稿希望の方は、直接、本部事務局へ論文を送付してください。原稿送付先住所、締切り等、詳細は必ず本部のホームページにてご確認ください。

(7) 日本アメリカ文学会第54回全国大会発表者募集

2015年10月開催の日本アメリカ文学会第54回全国大会(10月10日(土)・11日(日)、京都大学・吉田キャンパス)で発表を希望される方は、名前、住所、略歴、現在の所属、発表のレジюмеを事務局のメールアドレス (keikom@seinan-gu.ac.jp) に3月31日までに電子メールで応募してください。

以下の点に特に気をつけてください。

- (i) 略歴では、連絡用のメールアドレス、6~7月にかけてグラを送る宛先の住所(郵便番号)、現在の所属(常勤か非常勤か)を必ず明記する。
 - (ii) 発表タイトルに副題をつける場合は、和文は「—」。英文は「:」に統一する。
 - (iii) 発表レジюмеの字数は日本語で1200字程度、英文で400語程度。
- 例年会員に送られる年賀状にその詳細が記載されるので、発表予定の方は必ず参照する。

(8) 会計からのお知らせ

大学等の所属に変更がございましたら、年会費振込用紙にその旨をお書きいただくか、あるいは、KALS 会計(藤野功一: k-fujino@seinan-gu.ac.jp)までメールにてお知らせください。どうぞよろしく願いいたします。

以上